

また同姓の人によりて起されたものである。自分は此の場合に於ても康なる文字を、他の場合に於ると同様に康國の人なるを示す姓として解釋するのを、最も適當な見方と考へる。従て此の叛亂はソグディアナの人が突厥部族を糾合して、唐に反抗したものと解釋する。而してそのソグディアナ人なるものは、突厥と關係無しに此の地方に住んで居たものでは無く、降戸として六州の地に置かれるより以前から、深い關係を突厥との間に持つて居つた康國人で、南に遷つてからも従前同様その突厥の間に伍して居つたものと見るのが至當であらう。然らざればかく多數の突厥部族の間に在つて、自から葉護と稱し、可汗と稱し、之を統率するだけの勢力を作り出すことは、困難と謂はなければならぬ。

突厥に繼いで漠北に大勢力を有するに至つたのは回鶻部である。これと康國人との關係も、史上に明かに記されて居るものはない。併しながら少しく推究の歩を進めると、此の間にもまた深い關係の存在を認め得る。

回鶻人は東方に於る摩尼教の信徒として有名である。彼等の間に此の教の輸入されたのは、現存史料の示す處では、牟羽可汗(759—779)の時に、唐から摩尼教僧侶を伴ひ歸つたのが初めであるとされてゐる。即ち有名なる漠北カラ・バルガスンに存する回鶻可汗の紀功碑中に、この可汗が睿息等の四僧をつれて國に入つたと記されてあるのが夫れである。此の後摩尼教は引續き大に回鶻に行はれ、その僧侶は可汗の庭に重用せられて、常に政治上の議に參與し、唐との交渉の任務にも従事したことは周知の事實である。さてこの睿息を始め、當時回鶻に入り込んで居た此等の摩尼僧が何れの國人であつたかについては明記したものはない。然も少くとも此等の中にソグディアナ